

野球場研究

Ballpark research

1K03B004-0

赤木 翔

指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 木村 和彦 先生

はじめに

日本の野球場はプロ野球のペナントレースを興行し、数々の名場面が生まれる舞台としての役割を長年にわたり演じてきた。自らの役割を十分に発揮してきたように見える球場であるが、2004年のオリックスブルーウェーブと大阪近鉄バファローズの経営統合を発端に起きた球界再編の動きとともに、球場の持つ大きな問題も明るみになってきた。その問題の所在は球場経営のあり方、構造、設備などがあげられる。本論文においてはそれら問題の原因、現状についてまとめ、野球先進国アメリカの球場との比較や、野球に限らず日本のスポーツ施設に求められているニーズを考察することで今後の日本のプロ野球のフランチャイズ球場の在り方を自分なりに導き出すことを目的とした。

第1章、21世紀の野球場について

まず私が考える球場について定義することにした。私が理想と考える球場の定義は不利益を被る立場の人が少ない球場であると考えている。その理由として野球場は選手、ファン、運営者の主に三つの相関関係で成り立つと考えているからだ。これに関しては、平野哲行氏の「21世紀型の大規模スポーツ施設の在り方について」や吹原正晃氏「スタジアムテクノロジーとスポーツコミュニティの変容」などの先行研究から同様の視点を導くことができた。

第2章、球場施設の問題点としての芝

上記のような三者の視点で球場を見たとき、3者すべてに大きな影響があったのが、人工芝の問題であった。日本のプロ野球のフランチャイズ球場では12球団のうち9球団が人工芝を採用している。このような人工芝への3者の意見をすいあげるため、ここでは観戦者の声として2ちゃんねるなどの掲示板から、競技者からはベースボールマガジンに載せられている意見から、運営者としては読売巨人軍の滝鼻オーナーの意見を抜粋し、多少の賛否両論はあれど、三者ともから天然芝を理想とする意見を得ることができた。また、天然芝と人工芝の各々の利点と欠点、浸透した背景、かつて人工芝を採用していたが、今はほぼ天然芝へと移行しつつあるアメリカ大リーグの動きから日本の球状も天然芝を主流とするべきだという考えにいった。

第3章、天然芝開閉式ドーム球場が日本で浸透する可能性

この章では先に天然芝開閉式ドームが浸透しているアメリカと浸透していない日本球場の歴史と背景を比較することで、日本に天然芝開閉式ドームが浸透するかの可能性を探った。その結果歴史的に観て、天然芝開閉式ドームが求められたアメリカの背景とほぼ同じであること、一つ足りないものとして経済的な動きがあるということがわかった。

第4章、球場経営に関して

天然芝開閉式大リーグの球場経営には絶え間ない経営努力がある。かたや、日本の球場経営は非常に財政状況がきびしい。その理由としては、第3セクターが主流であるため、民間の活力が足りないということが要因であることがあげられた。また、ネーミングライツの浸透具合も非常に大きな要因である。日本のネーミングライツには稼働日数、契約期間などの問題がある。それらの解消のために、正確な情報開示や露出度を上げるといった球場施設運営者の努力が求められる。

第5章、日本の球場の現況

フルキャストスタジアムのネーミングライツの広告効果の発表や、NPM（ニューパブリックマネジメント）、開閉式ドーム球場のランニングコストを下げるテクノロジーなどを紹介した。これらのことはアメリカ同様、日本にも開閉式ドーム球場が浸透する経済的な動きが起こりつつあることを示唆していると私は考えている。

終わりに

観戦者、競技者、運営者の3者が常に最良の球場を求めかぎり、今後は天然芝の開閉式ドーム球場を建設すべきであると本論文を通して私は考えた。しかし、スタジアムはその競技の人気を左右する力を有する可能性がある。今回は天然芝の開閉式ドーム球場が理想であると私は結論付けたが、球場の求められる姿は時代の流れと共に変化する。その流れを絶えず感じ、常に理想の球場を作りあげようとする球場の経営努力が野球人気を根底から支えるような気がしてならない。